介護新聞
北海道発信の現場ニュース
中央情勢もタイムリーに
情報提供等や購読申し込みは　TEL 011(221)7777　FAX 011(281)2678　Eメール kaigo@medim.co.jp
ホームページ http://www.medim.co.jp

複合型在宅サービス独自展開

芦別慈恵園

デイ・ショート利用者、同一フロア活動

ヘルパーが通所兼務で情報共有

ニーズ柔軟対応「マルチ介護職」

芦別市内で特養等を運営する社会福祉法人芦別慈恵園が地域密着型通所介護、認知症対応型通所介護、短期入所生活介護、訪問介護を一体的に運営し利用者の生活を支えている「芦別慈恵園式複合型在宅サービス」。小規模多機能型居宅介護とも異なるデイ、ショート、訪問介護の既存サービスを活用した独自スタイルを展開し5年目を迎えた。2024年度介護報酬改定で創設を検討されている、新たな複合型サービスも視野に入れ実践を重ねている。

同法人が「芦別慈恵園式複合型在宅サービス」で提供しているのは、地域密着型デイ（定員18人＋総合事業緩和型サービス定員7人）、認知症デイ（定員10人）、ショート（同6人＋在宅入所相互利用2人）、訪問介護の4在宅サービス。

独自サービス展開に踏み切ったのは5年前、ショート利用者の「何もすることがなくて退屈」という声がきっかけだった。日中はショート専用フロアで過ごすため、和田直樹くらし事業部長は「観光しないホテル住まいのようなもの。日中の過ごし方が課題になっていた」。

保険者の市に相談しながら、特養1階地域密着型デイスペースに、当時は特養から離れた民家型で運営していた認知症デイを集約するとともに、2階ショートを併用しているケースの家族等から情報共有不足を指摘されたのも課題だった。そのため一部ヘルパーに地域密着型デイと認知症デイを兼務させる形で報告・連絡を促し、4在宅サービス事業を一体的に運営するスタイルを確立、5年目を迎えた。

日中は地域密着型デイ、認知症デイ、ショート各利用者30人ほどが同一フロアで仕切りなく、ふまねっと体操や学習療法など実施。職員は利用者のサービス種別を問わず、入浴・食事介助に当たる姿が定着している。

当初は小規模多機能開設も検討したが、登録定員が限られる点、担当ケアマネを変更しなければならない仕組み……

地域密着型デイ、認知症デイ、ショート利用者が1階通所フロアで一緒に過ごすメリットが大きい。2階だけで過ごしていたショート利用者が1階デイ利用者と一緒に、ふまねっと運動等に取り組むなど交流が増え、渋っていたショート利用を楽しみにするようになった。

ショート利用者も1階に下りてデイ利用者と一緒に活動できる独自の形態に移行した。

同法人の運営する訪問介護利用者のうちデイ、ショート利用をきっかけに週2回デイ利用を追加、ふまねっと運動を約3カ月間継続で歩行が安定し、つえなしで歩けるようになった例もあった。

移行直後は「独自のサービス形態に慣れるまでに3年ほどかかった」と藤山勇人複合型在宅係係長。サービスごとに利用者が分かれて座り、朝のあいさつ、食事なども別々など、従来通りの支援が続いたという。川邊弘美総合施設長は「一度決めたらブレずに進めるのがポイント。時間がかかっても、やめるという発想はなかった」。

左から川邊総合施設長、藤山係長、和田部長

独自の複合型在宅サービスでは、通所サービスを兼務しているヘルパーの役割が大きい。ヘルパー5人のうち通所介護兼務1人、通所介護と認知症デイ一部兼務が2人と、利用者、家族のニーズに柔軟に応える「マルチ介護職」として活躍している。

例えば、1日の仕事はデイ利用者送迎から始まり、入浴介助、体操、食事介助を提供。昼食を挟み午後は訪問介護に従事後、再びデイ事業所に戻り利用者を自宅に送り届けるといった流れ。送迎に合わせ買い物、調理支援など訪問介護を提供するケースも増えてきた。

24年度介護報酬改定に向けた議論で訪問、通所系サービスを組み合わせた新たな複合型サービス創設が検討されている中、藤山係長は「当法人の仕組みが合致するか分からないが、先駆けて取り組んできたことは職員の自信にもつながる」と期待を込める。